

調査漁具の紹介：アナゴ筈

下の図1～3はアナゴ（マアナゴ）調査に使うアナゴ筈（ど）です。この漁具は、長さ90 cm、直径10 cmの筒の両端に漏斗状の返しを付けたもので、筒の中にイワシなどの餌を入れ、アナゴをおびき入れます。昔は竹筒でできていましたが、現在は塩ビ管でできています。筒に開けた多数の穴は水抜きと同時に、資源保護のため小さいアナゴが逃げられるようになっています。アナゴは夜行性なので、夕方にアナゴ筈を沈め、翌朝引き揚げます。

図4は、2017年からの過去5年間に当協会が羽田空港周辺の調査で採捕したアナゴの全長組成です。1月～3月には全長40 cm程度の中型个体から60 cm以上の大型个体まで様々なサイズのアナゴが採捕されます。しかし、夏が近づき、アナゴの棲み場となる海底付近が貧酸素状態になるにつれ、湾奥のアナゴは酸素の多い湾口付近へ移動し、その結果、7月～9月にはほとんど採捕されません。10月になって水温が低下し海底付近の溶存酸素状態が

改善するとアナゴは再び湾奥に戻ってきます。この時期には30 cm以下の小型群も湾奥に入ってきて翌年の漁獲対象群に加わります。アナゴの産卵場は沖ノ島島南方の九州パラオ海嶺であることがわかっています。湾奥のアナゴも大型になると産卵のためこの海域へ回遊するのですが、東京湾から回遊するとその距離は直線でも約2000 kmになります。



図1 アナゴ筈



図2 船に積まれたアナゴ筈



図3 アナゴ漁の様子

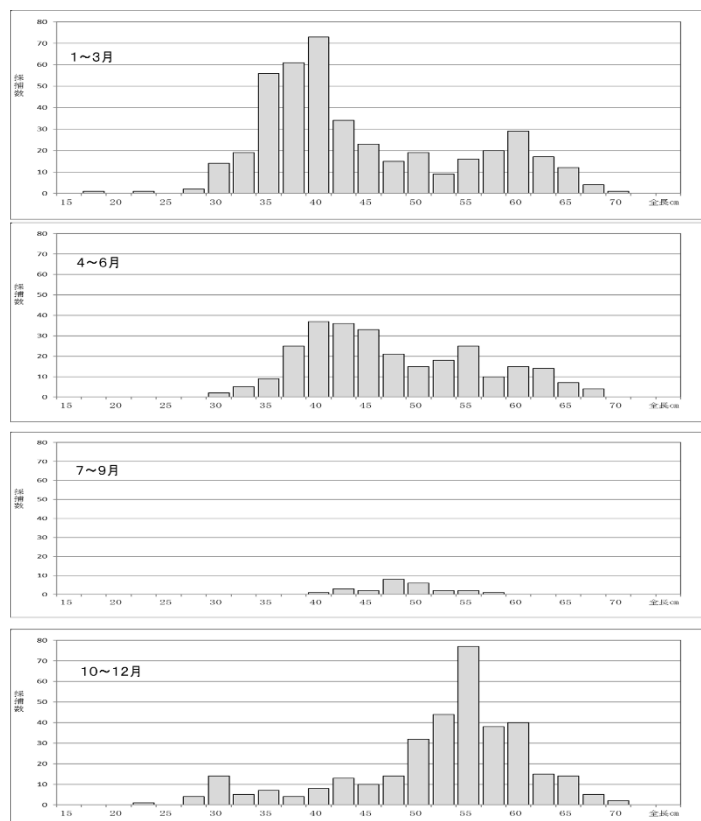


図4 マアナゴの全長組成